

きぼうのそと

刊 月 刊
N098

昭和四十一年八月一日 発行 (非売品)
岡山県都窪郡吉備町東町二五字垣方呼電四三七番
吉備 観光 協会

第97号アキ

大賀一郎理学博士 (その二)

大正六年南滿鉄道株式会社に奉命中興東京府博物館の創設に盡力した。同十二年には植物学の研究のために欧米各国に留学すること三ヶ年に及んだ。その間古蓮の實の研究に専念した。同十五年六月に帰任してから、奉天滿州教育専門学校の教授になつた。その間米國遠征学会名誉会員にして米國植物学会、米國樹学会及米國土壤学会各員となり植物学、土壤態学などに關する著作は數十種に及んでいる。

古蓮の實の研究は南滿州普蘭店附近の泥炭地に埋藏してあったものを此地の富豪である劉雨田という人の好意で採集したものである。推定五六百年前の古蓮の實を採集することになり成功したのである。昭和二年四月にその研究論文を教授会に提出して理学博士の稱号を受けられた。年は四十五才。博士はこれを先祖と亡き母の靈前にささげた。母がなくなつて丁度二十年目である。弟の潔は廿四才の時奉天医科大学に在学中であつた。この頃滿州は國際的に向蹙が少續し、中國全土に亘つて排日の聲が起つて来た。その翌年の六月四日滿州國を支配して来た張作霖が爆死する事件が起つた。これは表面暴徒のため企てられたものとなつてゐるが、實は日本軍閥の謀殺であつた。同六年九月十八日には奉天郊外の柳条溝事件が起り、博士のような純學術的教育者は顧みられなくなり昭和七年三月フソに滿州を去つて東京に歸つて来た。時に五十才であつた。博士の理想とする真理と自由。正義と愛を基調とする精神王國は全く縁が遠くなつたのである。

昭和十九年の春に東京高等農林学校の教授に就任した。この頃の潔が四十一才で六人の子を遺して病死したのでその世話をしなければならなかつた。その二十年五月廿五

日米國の異議で、東京市上落合の住居を大火で失つた。これは黒崎幸吉という人から譲受けた家屋でこの時六十七才の歳書を悉く焼失してしまつた。全く五十年の勞作も水泡にきれた。博士は涙で信仰する聖者ヨブの至言である「われ裸にて母の胎を出でたり。また裸にてかしてに歸らん。エホバは興え、エホバは取り給う。エホバの聖名は讃むべきかなし。と、そこで妻に向つて私共は生涯かけて獲たものを殆んど失つたが、決して不足をいふまい。寧ろ神に感謝を捧げよう。と決心し此から府中に住居を求めて住んだ。専ら蓮の研究と信道の喜びに満ちた。しかし昭和二十四年にはいよいよ復のドン底に落ちた。その頃千葉県横見川泥炭層二十尺を掘つて二千年前の古蓮の實を採集し、芽開花の成功をみたのである。時は同廿七年、これが世界最古の生命の存跡であると博士は信じたという。これは薄桃色の古代の夢を實現したのである。この珍種は「大賀ハス」といわれ、日本各地を初め中國、ドイツ、オーストリア、ソ聯などに分株した。その頃の身が一家が痲痺で、子供六人を無一文の博士が世話をしなくてはならぬやうになり、この外にも前に述べた潔の遺族を加えて苦惱の生活がフブいた。折が借家も他人の家に賣却されたので府中町の人々の情けによつて千葉県横見川へ家屋を建ててもうつたので、当時病氣にかかつてゐる妻と甥を連れこれに移住した。同廿一年三月二日妻は七十五才で他界したのである。

しかし博士はハス研究に余念なく昭和七年に滿州から歸朝した頃の念願であつた大和の当麻寺のハス象茶羅の研究に取りかかつた。それと云うのも傳説による中將姫物語に天平空字(七五七)——七六四)の昔懐佩(よこはぎ)の大臣の娘中將姫が織りなされたハス象茶羅が当麻寺に安置されてゐると聞いたからである。これは昭和廿八年三月に

國の重要文化財に指定されてゐるもので、寸法は縦横方一丈三尺寸の一大画面である。博士が調査したのは昭和三十七年の七十九才の時で、その結果はハス糸織でなく、絹糸の綴織であることを明かにした。しかし一千有余年の昔、製作された方一丈三尺（三九四センチ）の綴織は世界に冠絶たる重宝である。この研究中の廿六年に博士は紫綬褒章を賜わつた。また同世九年十二月には吉備町名誉町民に推挙された。

（ハスの語源について、余談になるがハスは「日字記」や「古事記」の我國最初の古史に「波知須」又は「婆知須」と示れてあり、「万葉集」には「蓮」や「荷」の漢字を用いてゐる。蓮の葉が蜂の巣にその形状が似てゐるのを、両語を合せて「ハクノス」ハチノスとなり、後ちに「ハク」を畧して「ハス」に訛つたものと思われる。昔から人々に愛運されてゐたものらしく古歌に

はちす葉の溜りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく 遊昭僧正

その他にも万葉集や古今集に多く詠まれてゐる。このうるわしい花がなぜ庶民に愛される感があるかとソウに、今から二千五百余年前の佛敎書に「毘紐奴の晴から蓮花を生じ蓮花の上に梵天が生れる」とソウ佛語に由来して、何時の頃からか花者と蓮花とを結びつけて佛式の葬儀の時は必ず蓮花を用ゐることに習慣づけられて今日に至つてゐるのが原因と考へられる。）

博士は当麻寺の調査が終つてから昭和三十九年十一月、脳軟化症で倒れ清貧孤獨のうち一人淋しく病床に横つてゐたが、生活保護を受け東京武蔵野病院に入院した。博士は金銭に恵まれなかつた。それは主流の學者からはブルートタからである。このことを知つた篤志家の手によつて東大附属病院中尾内科に移レ治療した。一時小原をみたと思われ

三

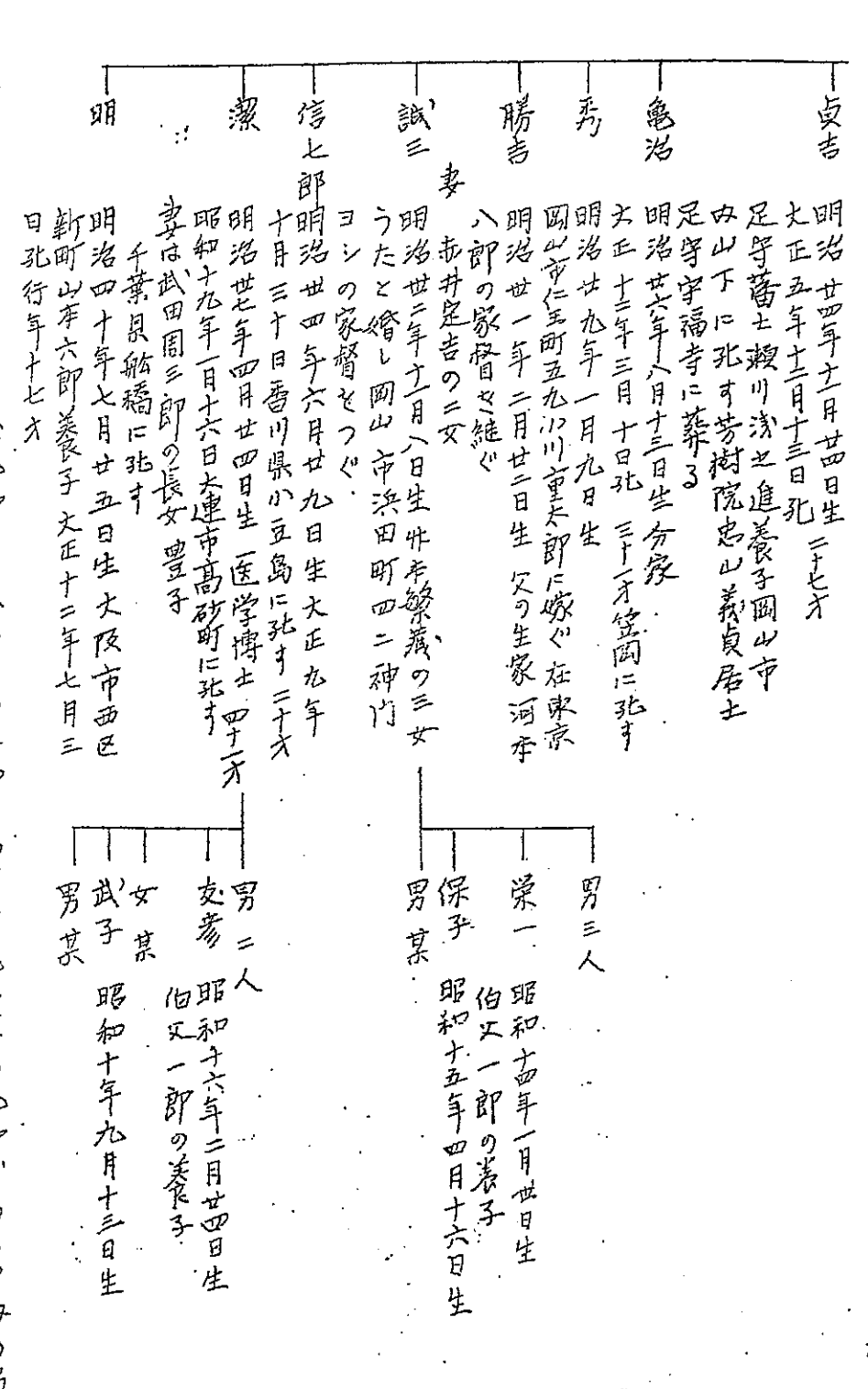
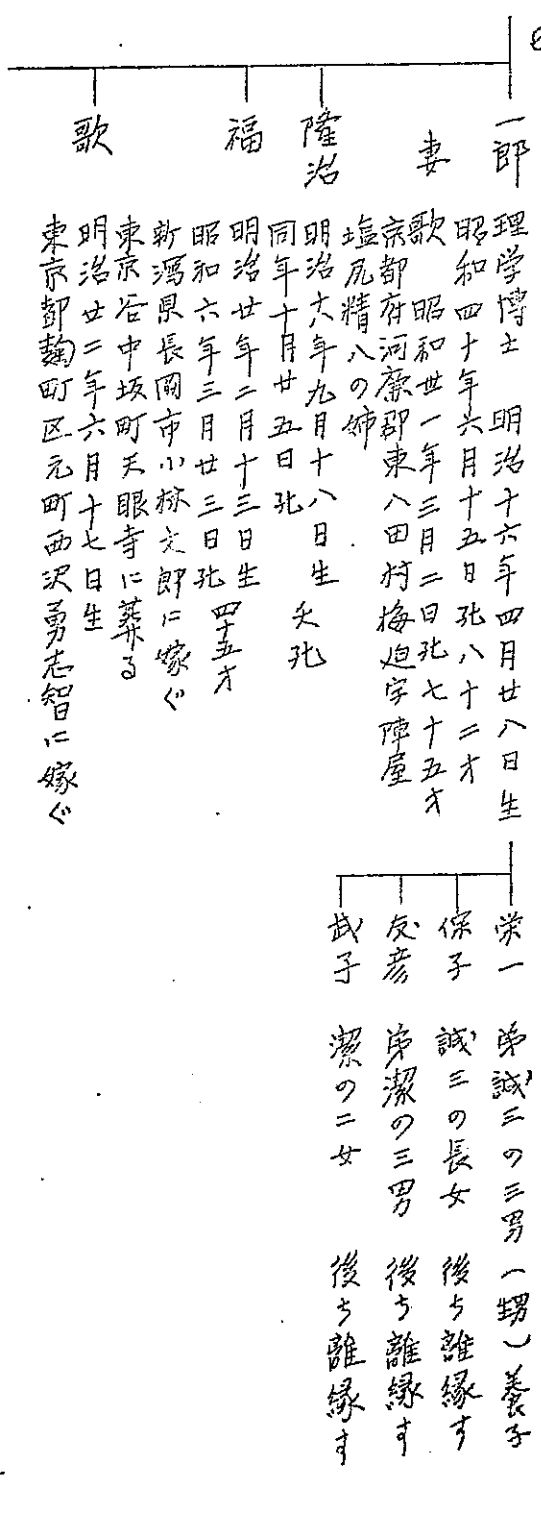
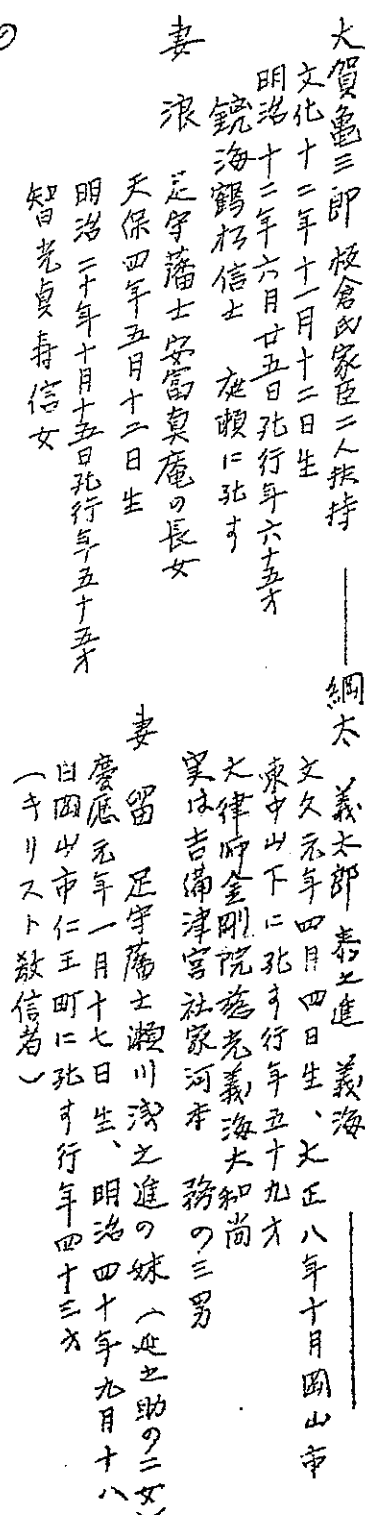
思われれたが老齡のため昭和四十年六月十五日午後九時十五分心臓衰弱のため永眠した。昭和三十一年の春先きたれた歌夫人の葬儀も清貧のためあす中とりまななかつたといふ夫人の寫真を枕もとに飾り、また四月廿八日ちようど博士の八十二才の誕生日に當り賜わつた勲三等瑞宝章と皇太子御夫妻から贈られた花束が置いてあつた。

博士がハス研究に志したのは五十八年前の二十四才、東大卒業の時である。恩師故藤井健次郎博士（東大名譽教授）からハスの花の受精する時間を調べてみたら、といわれたいの初まりである。博士が一生を清貧に甘んじてハスの研究に盡し病床生活を送つてゐることを聞き、全国から寄せられた見舞金は五百三十四万円に達した。（吉備所は後援資金として町民から約三十五万円を集めて送つた）病室には花、千羽鶴、絵巻などが持ち込まれ一面会謝絶しの郵便を犯して一日平均三四十人も見舞客があつたと新聞では報じてゐた。見舞金は約五百万円は大賀一郎お誂人会長藤遠喜人國際基督教大教授が大賀一郎育英資金を設けることに決め、大賀一郎の住んでゐた府中市と生家の吉備所にそれ／＼寄附され恵まれたい学生たちに出資することになつたといふ。

遺骨は東京多摩墓地と吉備町川入小西にある大賀家老堂の墓地に分骨埋葬された。告別式は六月廿日午後一時半から東京國電文久駅前婦人矯風会館でキリスト教によつて行われた。また吉備町では名誉町民として十月九日午後一時から吉備中学校講堂で同じキリスト教による町民告別式がとり行われた。式場には吉備中学校の生徒が五百余名、町内外の来賓者数百名が列席した。式次第は藤沢武義司会のもとに岡山県知事加藤武徳岡山市長岡崎平夫、山陽放送会長谷口久吉、岡大教授藤井 駿、町長高木 潤などの序辭があつた。特に岡大教授藤井 駿の故人の畧歴、森豊太郎の博士の幼年時代、御里

の實語は印象的であつた。ついで賛美歌の合唱、聖書の朗読などあり終りに遺族を代表して嗣子大賀深一の挨拶があつて午後三時半終了した。式場には大賀博士が執念六十余年ハスの研究を物語る数々の苦心の遺品が陳列せられ参列者をして驚嘆せしめた。

△大賀家系譜 (第九輯 系譜簿に一部掲げたが一郎の祖父より詳記す)



一郎には実子はなかつたが兄弟は多かつた。一郎を頭に男九女三の兄弟である。母の弟は十七、八才で大賀家へ嫁入したのであろうか十九才の時一郎をもうけ一年あき位に十二人の子を生んだ。四十三才の歳の七月に末子の明を生み落して間もない二ヶ月後の九月に病がなにかで北んでいる。この時一郎は廿五才に達し東大在学中であり兄弟が多かつたのを綱六は妻を失つて家計上非常に苦難の道を通つたものと想像せらる。

△ 大賀博士は幼い時からクリスチンであつた。それは母苗子が熱心なキリスト教の信者であつたのでその感化によるものである。殊に東京に在学中は内村鑑三先生の門下にあつて伝道をうけ、高州に在任中もその教に導かれ、先生が昭和五年に死去するまでの前後二十余年間にわたる恩師である。(内村鑑三という人は高崎藩(群馬県)の武家の子で文久元年に生れ札幌農学校を卒業してキリスト教徒となり、アメリカに留學後は第一高等學校の講師になつた。明治廿四年に不敬事件が起つてその責任を負うて辞職した。其後新聞記者などをした。熱心なキリスト教人道主義者で日露戦争にははげしく非難論を唱へ青年層には大きな影響を興へたが、常に官憲から狙まれてゐた。七十才で昭和五年に此世を去つた)。

内村鑑三の「後世への最大遺物」と云う書に(我々が扱つたこのうるわしき地球このうるわしき國、この我々を育ててくれた山河、我々はここに何も遺さずに死んでしまいたくない。何かこの世に記念物を遺してゆきたい、金、事業、か、文學、か、教育、か、これらは何れも後世に遺す価値あるものである。しかしこれ等のものは誰かにでも遺すことの出来るものではない。これはまた本當の「最大の遺物」ではない。それならは誰にでも遺すことのできる本當の「最大の遺物」は何か。それは「勇ましい高尚な生涯」である)といつてゐる。博士はこの教を生涯実行にうつしたのである。

博士は多く語りずともその根柢は神の存在の如く、われづくに平等主義を教えた。平等主義とは民主主義の基礎である。人々が神を忘れる威力や金力で動さぬ易いほど心の弱さ醜さをあらうれば、ついに利己主義に陥入り社会の安定はいつまでたつても保たれないばかりか金力にすべてが左右されると、それ故に却つて悩み苦む原因となるのである。

七

博士は或る時アメリカの一女性から大賀ハスの研究に困つてことを聞かされて三十万円の寄附金を送つてきたが研究の助手をしてゐた女性が嫁入するといふので、惜しげもなくこの三十万円をそのまま、個別に贈つたといふ。また博士は友人に着てゐる洋服や履いてゐる靴を誰かに恵んでもらつたなど懐面もなく卒直に語る。この言葉を聞くと、いかにもあさましく慙せられ食糧性のように思われ、とやかく博士の心情を論議する人があるが、博士は日常の生活を探考へることなく他人の困つてゐるものを見れば手近にあるものを惜しまず喜んで恵み呉れるといふのだから一点の曇りもなく高遠な心の清らかさが窺われるのである。取り込むことは取り込むが、出すことはビター一文も出さないと云うのではない。|| ありのまま、を語るようになれば尊き心の持主である||

博士の高潔な精神は到底劣紳族ではむづかしくて解しがた。劣紳族といふは中國の古い書物に「土豪劣紳」といふ言葉がある。いま和語になすと「劣の持ちは立派な家に住み立派な服装をしてゐるが、表面では徳望のある上層社会の人のように見えるがその実、人格の乏しい卑劣な紳士」といふことになる。つまり泥沼の池は水面は清らかに澄んでみえるが、その底は泥で覆われ、鼻向にもならぬ、土性骨の人のことである。いつた一人間の幸せといふものはどこにあるのだらうか、博士は「良き健康と、清純な家庭、一生を通じて悔なき幼の三つを併せ持つこと」といつてゐる。社会的な身分の高さなどでは人の幸せは決定づけられない。また財産のあるなしなどは幸せとは無関係だといつても過言ではない。また偉い人になるとか、金持ちになるとか、いふことは空しくじに當るのに似てゐる。このことを自分の幸せと結びつけるのは愚の骨頂である。

△ 福田村の岡 正の所蔵する大賀博士の和章に「ありがたやめぐみめぐまこれわれはいく」。といふのである。これを送にいえば「

がめつや、やとりつとられつのははくし。と云ふことになる。これが現世の様相であるが互に恵み恵まれ助け合ひの生活が続けば自ら明るく社会が生れてくる。自己欲望にかられ奪ひ合ひの暮れが続く限り、いつまでたつても任みよい世の中は実現しない不安は増すばかりである。

○ 郷土吉備町の生んだ大賀博士は国宝人間である。吾世界の偉人と尊敬した。天竺の教えに「国宝とは名にもつて、宝とは道心なり。道心ある人を名づけて国宝となす」といつてゐる。世間でいわれる国宝に二種類ある。古文化財をさす場合と、人間国宝といふ場合がある。普通の人が容易にまねて出来な、創作品を生産かけてなにかを創作し得る人に当てはめられている。これはその作品が国宝なためであつて、これを製作したものは勝れた技巧者というだけで、本当の人間国宝とはいひがたい。真に人間国宝と仰がれる人は純粋私欲をはなれ、生理道を行ふに徹した心の豊かに恵まれた人でなくては、いえない言葉だと思ふ。

△ 蓮は泥沼のなかに生育し立派な花を開く、その形は嵩高なものである。佛教では妙法の教えを蓮華にたとえて衆生に説かれてゐる。この蓮の実は一千年二千年の後ちになつても立派に芽を出し思事な花を咲かせるという研究は大賀博士によつて世間に発表された。その大賀博士は「妻もなし、子もなし、財もなし、家もなし」といつて八十二才を一期として静かにこの世を去られた寔に哀悼に堪えない。博士は終生物質に執着のない靈妙な精神は血脈は絶えたが、神の如く博士を敬慕する世嗣は絶えることなく後ちの世までも永遠に生き榮えることであらう。

△ 大賀博士が生前滞脚すると必ずといつてもよい位郷土の老輩である大養本堂翁と公麻黄堂翁(同人物篇参照)の墓前に詣つることを欠さない。その人極の一端が窺われる。先年大養本堂翁の遺徳を凌ぎ、大賀博士の染筆を燦めし「誌せば前かすの碑」が小学校の庭に建てられた。この建碑にあつて卒先レ政界や町民から多くの寄附金を集めた世話人たちは毎年五月十五日の命日に川入にある本堂翁の墓前に手向けてゐるだらうか。一向にその姿は見受けられない。ただ小、中学校の生徒が数百名、先生に引率されて詣づる敬虔な態度を見るだけである。建碑の企てには美名のもとに何かその陰に暗いものがたまたよつてゐたのではないかとさえ、いまに至つて真意を疑はれておしめたがたい。青少年を善道にするには口先だけではなく大人自らが実践し、範を示さないことには實効はあらわれない。頭がまわらずして尾がついて廻る道理はどこにもないのである。

○ 中屋加右衛門

加右衛門は藩政時代庭瀬の町屋敷、いまの庭瀬本町に住し、代々荒物商を営み板倉氏の御用を勤めた商人である。加右衛門は享保二十年六月十二日の生れで、三十才を過ぎた明和、安永の頃から家業の傍、心学を修め良心的商法によつて顧客の信用を得て繁昌し財をなした町人である。五十才になつたので嫡子の五助に世を譲り、次男の若三郎には暖簾をわけ分家させた。加右衛門は隠居の身となり益學間に志した。(おわり) 未完

エバーソフト
寝具一式

中山ふとん店

吉備町・本町

吉備局電四番有線七一〇番

セルフサービス

河内百貨店

吉備町下撫川大橋東詰

吉備局電七番
有線9108